

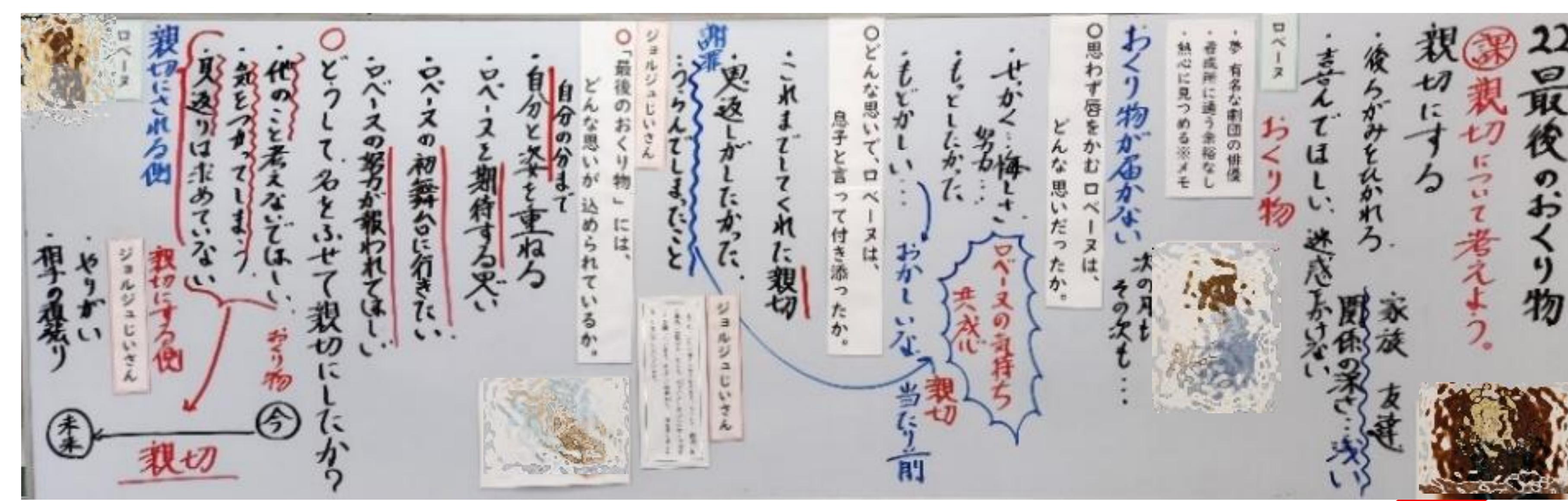
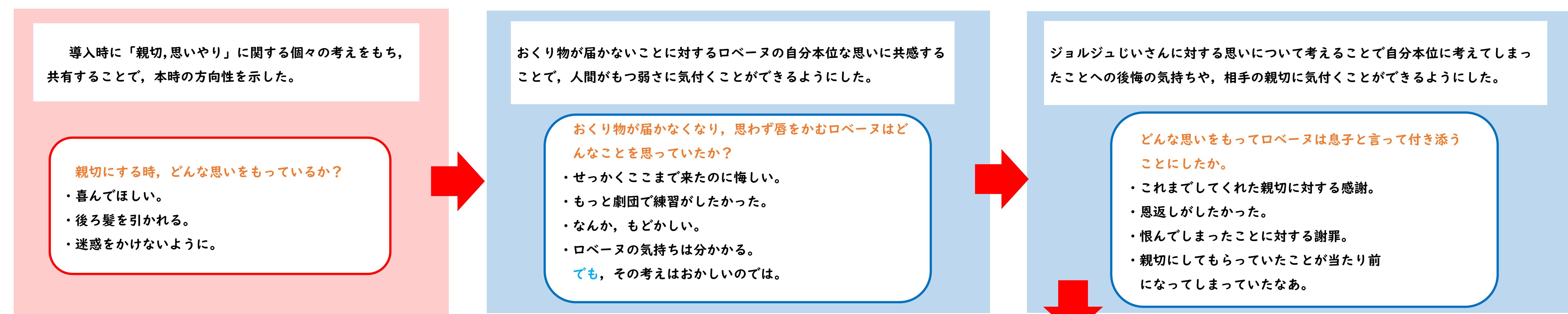
特別の教科 道徳 授業実践『最後のおくり物』

本時のねらいは、「俳優を目指す貧しいローベーヌとローベーヌを応援するジョルジュじいさんの姿を通して、親切に対する人間の弱さや、親切のよさに気付かせ、相手の立場に立って親切にしようとする心情を育てる。」であった。

これまでの実践を振り返ると、子どもたちの道徳的諸価値に対する考え方がホワイトボードに羅列されるが、ねらいである道徳的諸価値の理解に関する垂直的な深まりを見せない授業展開に課題を感じた。その要因は、教材の特質を生かした道徳的価値を理解していくために必要な教材の把握が曖昧になっていることや、ねらいの設定が抽象的なものに留まっていること。また、こちらが深く考えさせようとする思いがある一方で、子どもたちの考えを深めていく発問の精選が足りなかつたり、考え方が深まらないうちに授業を展開させてしまつたりすることで、道徳的諸価値に対する深い理解へと結び付かないことが考えられた。そのため、子どもたちにとって「すでに分かりきっている」理解から、新しい価値の気付きがある授業展開につなげいくための事前の準備が必要であった。

本実践では、教材「最後のおくり物」の学習を通して、子どもたちの道徳的価値の理解を促すために、教材の状況を子どもたちが理解できるようにした上で意図を明確にした発問を行った。その手立てとして、①「教材の理解につなげる発問（登場人物の状況や心情）」を行い、教材を把握し、考えていく土台を揃える。②「人間の弱さを理解することにつなげる発問」を行い、相手の「親切、思いやり」に関する行動に慣れてしまうことで、つい当たり前のように思ってしまうことがないかどうか考えていく。その上で、中心発問を投げかけ、登場人物の「親切、思いやり」がもたらすよさに気付いたり、実現させる難しさについて考えたりしていく。また、自分の考えを広げたり深めたりするために、③「友達の意見に対して共感、質問を視点にコメントを入れる時間」を設け、他者理解へとつなげていく。の3点を設定した。

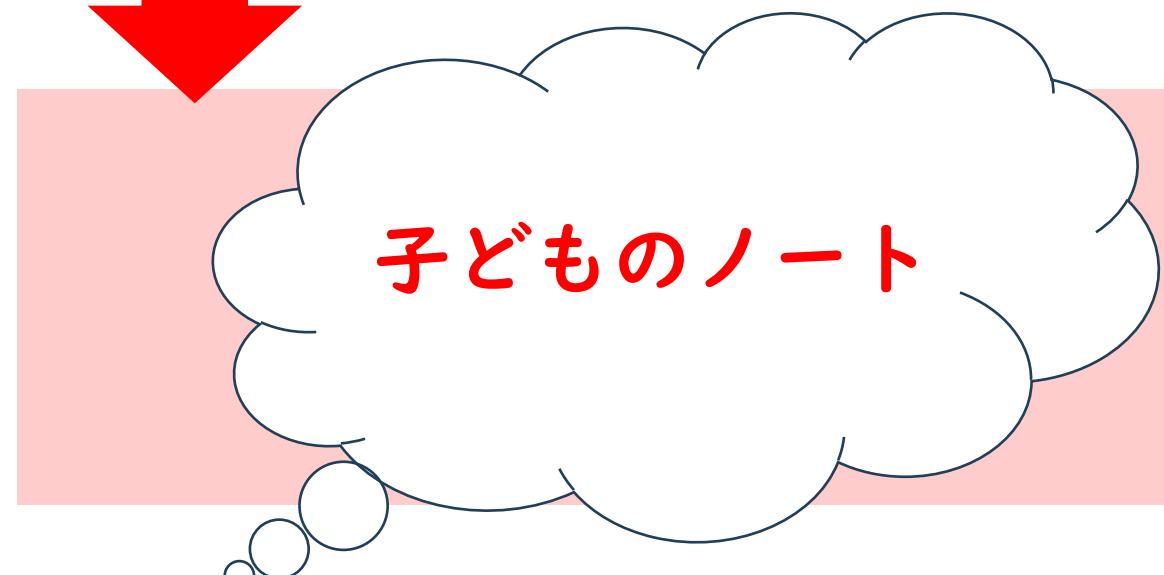
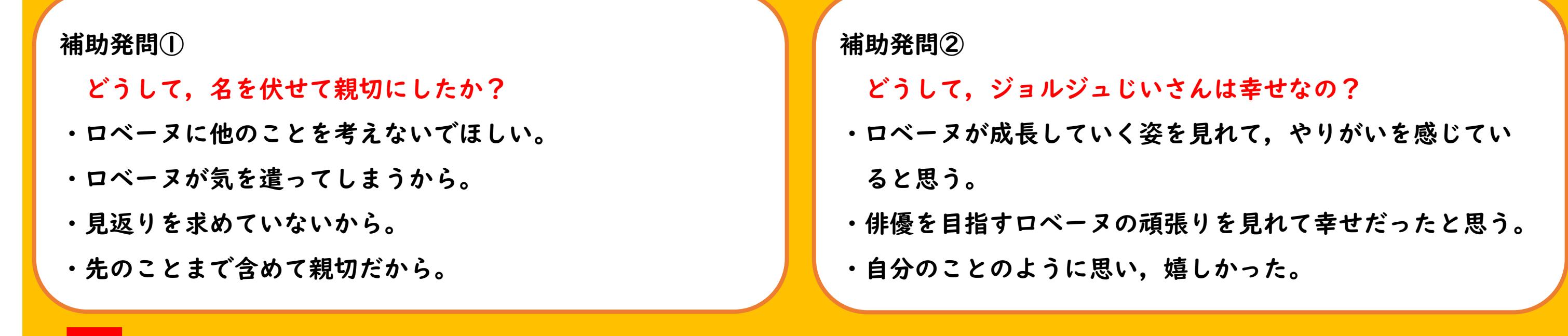
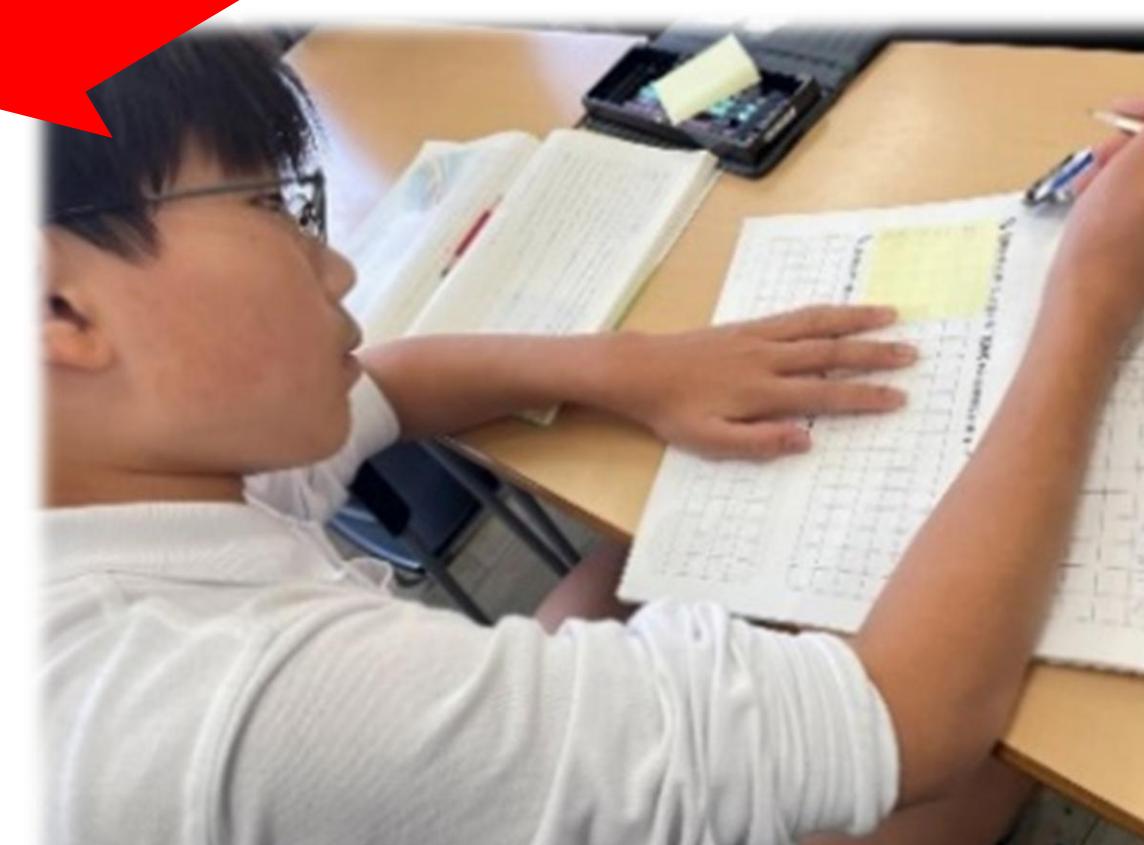
これらの手立てを通して、本時の内容項目である「親切、思いやり」に関する道徳的価値の理解を促していくことを目指した。そして、価値理解、人間理解、他者理解を基に教材にある価値の意味に気付き「親切、思いやり」に関する価値にこれまで以上に向き合っていくことにつなげていくことをねらった。



ジョルジュじいさんの視点で考えていく補助発問をすることで、相手の立場に立って考えるよさや、実現させる難しさに気付くことができるようになつた。

ジョルジュじいさんの『最後のおくり物』には、どんな思いが込められているか。

- 自分と姿を重ねている。（自分の分まで）
- ローベーヌを期待する思い。
- ローベーヌの初舞台に行きたい。
- ローベーヌの努力が報われてほしい。



最初は正直、親切にするのに理由なんていらないと思っていたけど、どこかでその人のことを考えて喜んでほしいと思っていたことが分かった。親切にすると相手も自分も明るくなると分かった。

今日の学習で、関係の深さに限らず、自分が幸せになり、相手も幸せになれる関係を親切ということだと分かった。

どんなに関係が薄くても、その相手の夢を期待して何かをしてあげようとする心が親切だと思う。親切って、やっぱり関係が深いから行うとかではなく自分が相手と関係が浅くても、期待や共感できることは本当の親切だと思う。

その場だけでなく時間の幅がある親切は「誰かのため」という目的だけでなく、自分の生きがいや深い絆なども得られると思った。自分もその親切がずっと後の時間までつながっていく親切ができるようになりたい。

親切は、その時だけと思っていたけど、相手を思いやるということは、その時だけでなく、その先まで続いているということを今回の学習で知りました。

親切にする側としては、自分は親切をするつもりではなく、なんらかの期待があったり、自分を重ね合わせたりした結果による行動であるということが分かった。また、親切にされる側は、それを分かって、その期待に応えないといけない。

本当の親切とは、相手に気を遣わせることなく、相手が気付かないところで行うものだと思いました。それが、思いやりある行動に対して、当たり前に感謝できることにつながるのかなあと思いました。

親切は、やっともらった時は、とても嬉しく感じられるが、何度も親切が続くと、それを当然のように感じてしまう。それを防ぐために、親切してくれた人には感謝の気持ちをもたないといけないと改めて感じた。

本当の親切とは、誰かから見返りがほしいから行うのではなく、本当に自分が相手にしてあげたいという強い気持ちが生むものだと思った。それに貢献できた時、親切にした側も幸せを感じると自分は思った。自分は、これから強い気持ちが生む親切ができるかわからないけど、少しでもやっていきたいと思った。

してあげている親切は、本当の親切ではないと気が付いた。ジョルジュじいさんは、そういうところも考えて、お金を送っていたから、「本当に」の優しい人なんだということが分かる。

親切とは、自分のステータスや利益のためにやるものではなくて、自然にすっとしてしまふような抑えられない一種の感情なんだと私は感じた。

親切にする時、いつも私は、今の事しか考えていなくて、そのたまたま言った親切がこの時も役に立ったんだよ！」と、まれに思うことがあるけれど、今日の学習を通して、未来のことも考え親切にしたいと思う。



本実践のねらいを達成するために、道徳的価値に含まれる価値理解、人間理解、他者理解に関する子どもの姿を以下のように整理した。

価値理解…価値のよさ、価値の大切さ

- 親切は、相手の立場に立つことが必要だな。
- 親切にする側の思い（喜び）もあるんだな。

※主発問を通して考え方を聞くだけでなく、意図的な補助発問をすることで理解を深めていく。

人間理解…人間の弱さ

- 相手の親切に慣れてしまうと、つい当たり前のように思ってしまうな。（感謝）（親切、おもいやり）
- 関係が浅いと難しいな。（親切、おもいやり）
- 相手のことを考えているかな。（親切、おもいやり）

※批判ではなく、自分のこととして考えていく。

他者理解…多様な考え方

- 自分とは違うけど、その考え方もあるな。

実践を終えて

本実践で取り扱う道徳的内容は、第5学年及び第6学年の「B-（7）親切、思いやり」にあたり、「誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること。」である。導入では、「どんな思いで親切な行動をしているの？」に関する自分の考え方をもつことで、本時のねらいの方向性を示した。展開では、おくり物が届かないことに対するローベーヌの自分本位な思いに共感することで、人間がもつ弱さに気付くことができるようになつた。また、ジョルジュじいさんに対する思いについて考えることで、自分本位に考えてしまつたことへの後悔の気持ちや、相手の親切に気付くことができるようになつた。本時では、親切な行動に対して当たり前に感じてしまうことへの共感と反省に関する子どもたちの意見の交流が見られた。その上で本時の中心発問「ジョルジュじいさんの『最後のおくり物』には、どんな思いが込められているか。」を問いかけた。そして、意見を共有する中で、子どもの多様な考え方を羅列することに終始せず子どもたちの道徳的価値の理解をさらに促すために、補助的な発問を行い道徳ノートに書く時間を設けると共に、友達の考え方に対する自分の意見を付箋に書く時間を設定することで、「親切、思いやり」に関する価値について自分の考え方を広げたり深めたりできるようにした。友達の考え方を受け止め、自分の意見を伝える時間は付箋に書かれている内容や発言から、広い視野で価値について考える時間となつたのではないかと考える。

本実践では、子どもたちにとって「すでに分かりきっている」理解から、新しい価値の気付きがある授業展開につなげいくことができた。本時の教材で考えることができる価値理解、人間理解、他者理解について整理、分析することの重要性を改めて実感した。ただ、授業展開において、道徳的価値を理解していくことに偏りが見られる授業展開になつたことが課題である。今後、教材分析はもちろん発問の精選に加え、発問に用いる「言葉」にもこだわりながら、道徳科の時間において、どうすれば、これまで以上に道徳的価値に子どもたちが向き合うことができるのかを分析し、今後の実践につなげていきたい。